

節用集饅頭屋本の初刊本と通行本と

近* 藤 尚 子

Two Kinds of Editions of *Setsumyōshū Mamuyabon*

Takako Kondo

要 旨 節用集饅頭屋本初刊本と通行本との間には同じ体裁の本でありながら六七〇箇所^①に及ぶ異同がみられる。これは通行本が初刊本をもとに改変したと考えられるものである。本稿ではこれらの改変を七種に分類し、そのうちの六種について概観し、他の古本節用集諸本の状況を参照しつつその位置づけを試みた。改変は概ね全巻にわたっており、通行本がこれらの改変によって「新しさ」をうちだそうとしたことがうかがえる。項目の増補・削除・異同に関しては通行本が初刊本の体裁を守りながらスペースの調整をしてみた様子を見ることが出来る。また所屬門や見出し語の表記については通行本独自のものがいくつかある。ただし節用集諸本の状況を見ると大部分の改変はその変異の範囲内に含まれる。古本節用集全体をこのような変異を含みながらひとつの資料体としてとらえることができるのではないだろうか。

はじめに

饅頭屋本とよばれる節用集にいくつかの版が存在することはすでに報告されている^①。それらによれば少なくとも三種^②の版があるようである。本稿では現在影印でみることのできる東京教育大学附属図書館本と圖書寮本とを比較・検討してみたい。

この両書の間でまず目を引くのは門名の異なりである。教育大学本でみると

天地 時節 草木 人倫 支体 官名 畜類 財宝 食物
言語

の十門となっている。この門名はイ部によったが、ロ部以下では頭字のみを「天」という形で表示している。掲載の順序はハ部に従った。十門を完備する十八の部のうちでこの順を採るのは、ハ・カ・タ・ウ・サ・シ・ヒ・セの八部で最も多い。次いで支と官とが入れ替わっているのがヲ・フ・テ・キの四部である。あとの六

* 本学助教(今野尚子) 国語学

部はそれぞれに異なるところがあり、一致しない。また、ト部のみ「人―」のあとに「人名」門を立て、「融大臣(ヘトヲルノヲト)」一語を収める。饅頭屋本(教育大本本・圖書寮本とも)全巻を通じて人名はこの一語のみで、人名門もここにしかない。節用集は一般に中国・日本の人名を載せることが多い中でこの方針は特異であるといえよう。

さて右に掲げた十の門名のうち、「畜類」と「言語」とが圖書寮本ではそれぞれ「生類」「雑用」となっているのである。ただし「生類」に関してはロ・ホ・ハ・ナ部で「畜類」となっており、「雑用」に関してはロ・ハ・ニ部で「言語」となっている。

最初が天地(ル部を除く)、最後に言語または雑用であることが共通している以外は、一巻の中でこのように門の順序がさまざまであるにも関わらず、両書の間には順序の異なるところはない。さまざまな順序がさまざまななりに一致しており、両書の基本的な枠組みは同じである。ただし圖書寮本には教育大本にはみられない門がいくつかある。

ニ部 官―(人―と生―との間)

ワ部 時―(天―と草―との間)

ソ部 時―(天―と草―との間)・官―(人―と支―との間)

エ部 時―(天―と草―との間)

ニ部では教育大本で「人―」末尾(十オ)に 入道 貳位 女性と並んでいるのに対し、圖書寮本では「人―」末尾(やはり十オ)を 入道 女性 とし、「官―」という門名を入れたうえで 貳位 を掲げる。この両者の先後を考えると、最初はなかった「官―」を「人―」の後に設けたうえで「人―」から貳位のみをそこに移した

とみるほうが、最初に備わっていた「官―」を削ったうえで女性と貳位とを入れ替えたとみるよりは自然であろう。そう考えればその二行あとの「言―」第一項が教育大本では 句 であり、圖書寮本では 日課 であることも説明できる。つまり、この面では門名の「官―」を入れ、「支―」に 人躰 を移してきたために門名の「言―」(圖書寮本もニ部はこの門名である)の下に一字分しかスペースがなく、単字項目の集団の最初にあった句を移したのである。もちろん字詰を調節して「言―」まででその行を終えることもできたであろうが、そうしなかった理由は不明である。また、句よりも前に単字の見出し語として 吟・鈍・俄 の三語がみえているが、それより後にある(といっても同じ面ではある)句を移動した理由も不明である。鈍については、教育大本では「鈍 莞尔(笑)／」となっているが、圖書寮本では「莞尔(笑)／鈍」となっている。これも教育大本の状態から項目の出入りのために行末のスペースの大きさが変わってしまい、項目を入れ替えたものと考えることができる。逆に同じ行に入れられるからといってわざわざ鈍を前に持つてくるとは考えにくいのである。つまり、両書は教育大本が先で圖書寮本がそれを改変したものにとらえることができる。この先、論をすすめるにあたり教育大本を初刊本、圖書寮本を通行本と呼び、初刊本が通行本でどのように改変されたのか、という方向で考察していく。この前提が正しければ以下の考察には矛盾が生じることはないであろうし、もしも正しくなければそれが明らかになるはずである。

ここでさきに述べた門名の異なりにたちもどると、初刊本では統一されていた門名を通行本は何かの理由で変更したということにな

る。具体的には畜類を生類に、言語を雑用に改めたのである。しかしその際に改めそこなったところがいくつかあり、結果として圖書寮本では門名の不統一が起こった。もちろんひとつの節用集の内部で門名が不統一であるということも時としてみられる。だから不統一であった圖書寮本の状態を教育大本のように統一したととらえることも不可能ではない。しかしそれならば圖書寮本では少数派である畜類・言語に統一するより多数を占める生類・雑用に統一するほうが自然ではなからうか。版本の再刊や再刻というときに、同じ書名を冠しながら異なるものを創り出そうとする動きは西鶴の浮世草子などにもみられる。前の版とは異なる点を売り物にしようとするのである。畜類・言語は節用集の中では多くのものにみられるごくありふれた門名である。一方の生類・雑用は他の節用集にはみられない特異なものである。とすれば、新しい版を作るときに独自の門名でオリジナリティを出そうとしたとみるほうがやはり自然ではなからうか。その際に改めそこなったのが、圖書寮本にわずかに残る畜類・言語という門名だったのである。

改変の諸相

具体的にどのような改変が行われているのかをみるために、イ部時節門を取り上げる。この箇所を選んだのは語数が少ないにもかかわらず多くの改変がみられるからである。教育大本は一丁裏四行目行頭からで次のようになっている（傍訓は外し、項目のみを掲げる）。

〔時節〕夷則へ七月／名 豕子へ十月／亥□◇／一紀へ十二年
不知夜月へ十六夜／稲妻 一周忌 戌亥 生見玉／入逢

晩鐘

項目数は十である。これが圖書寮本では次のようになっている。一丁裏三行目、天地門の末尾三項の次からである。

〔時節〕古 今／戌 亥 朝暮 夷則へ七月／名 豕子／へ十月／亥日◇一紀へ十二年◇晩鐘 入逢／生見玉 不知夜 月
へ十六夜／夜◇一周忌

項目は十三に増加している。しかし単純な増加ではない。まず圖書寮本の最初に置かれた「古 今」は天地門からの、また五項目の「朝暮」は言語門からの移動である。この三項はすなわち語の所属の変更ということになる。次に「戌 亥」は教育大本では連続して一語のようにみえるが圖書寮本では明らかに二語になっている。時節門の最初に「古 今」という一字の見出し語を置いたので、一字ずつとした「戌 亥」を移動してそれにつづけたものである。これは見出し語の認定にかかわることからである。「稲妻」は時節門から移動して天地門にもともとあった「電」の次に置かれた。結果として項目数のうえでは三語の増加となった。このような内部的な増減のほかに、ここには例がないが、まったく新しい項目の増補が九一項、完全な削除が八四項ある。

教育大本では門の末尾に置かれていた「入逢 晩鐘」を圖書寮本では「一紀」の次に移している。これはこの門を一字語で始めるという改変を加えたのにあわせて、一字↓二字↓三字以上と排列しなおしたということであろう。なおその際に入逢と晩鐘との位置を入れ替えていることも注目される。

もう一箇所「支」をみておく。教育大本は
頤 面 拇 瘡 癩 于 區（しんにょうのかたち） 面影

の六項で、圖書寮本も出入りなくやはり六項である。位置の移動もない。しかし圖書寮本ではヲトガイ↓ヲトガヒ、ヲ、ユビ↓ヲホユビと傍訓二箇所が改変され、さらに于區（しんにょうのかたち）↓噫と、見出し語の表記も変更されているのである。
このようにさまざまな改変がみられるがそれらを整理すると次のようになる。

- I 項目の増補 九一
- II 項目の削除 八四
- III 同一門内での移動 一三七
- IV 所属門の変更 六三
- V 見出し語（語形や表記）の変更 七三
- VI 傍訓変更 一八七
- VII その他（注記の扱い等） 三九

これらの改変の一々について詳述することはできないので、改変がどこにどのように加えられているのかを中心に、以下考察する。

項目の増補と削除

項目の増補は九一項ある。門別の内訳をみると

- 天地 九 時節 一 草木 四 人倫 三 生類 十
- 財宝 十 雑用 五四

で、支体・官名・食物にはない。ここでは雑用への増補が半数を超えていることに注目したい。また全巻をほぼ四等分してみると、イ〜ヲ 二五、ワ〜ノ 十六、ク〜サ 二三、キ〜ス 二七で、全巻に亘って偏ることなく増補が加えられていることがわかる。

一方、項目の削除はやや少ない八四項である。門別の内訳は、

- 天地 六 時節 一 草木 七 人倫 三 支体 一
- 畜類 十 財宝 九 言語 四七

で、官名・食物にはない。この数値を先ほどの増補の数値と比べると、両者はほぼ重なっていることがわかる。四等分した数値は、イ〜ヲ 二十、ワ〜ノ 十四、ク〜サ 二二、キ〜ス 二九で、こちらも増補にほぼ対応している。このことから、初刊本から通行本への項目の増減については、一方的な増補や削除ではなく増補した分を削除する（あるいは逆に削除した分を増補したのかもしれない）という形で行われたことがわかる。それは多くの場合「項目の入れ替え」という形で観察される。初刊本・通行本ともに本文（ス部）が九十丁表で終わっていることも、改変が全体の規模を保存しつつ行われたことを示している。いま、初刊本から通行本で項目が入れ替えられたとみえるものを出現順に掲げてみる。

初刊本 通行本

- イ 財宝 硫黄イワウ 韻會インエ
- 言語 (一)―落索ラクサイ (一)―廷チャウ〈油煙〉
- ハ 財宝 鉞〈同〉(ハチ)〈 鉞〉―子ハツン
- ハ 言語 (兵)―書(シヨ) 表相〈ウサウ
- ヲ 言語 迂ヲシマロバス迂ヲシツクル 晩ヲソナハル馱ヲウスル
- カ 畜類 貝鮑カイアハビ 鮒〈同〉(カマス)〈鮓〉〈同〉
- タ 草木 華タテバナ 筍タカンナ
- ム 草木 零餘子ムカゴ 榎木ムロノキ
- 財宝 馬齒ムマガハ 馬櫛ムマガシ
- ウ 言語 右往左往ウワウザウウ 後疎ウシロメダシ変ウツロウ
- 鳥羽玉ウバタマ 繇ウラカク〈易〉

ク	言語	十六善神ウチフルウ 宏才クハウサイ	遊心ウカレゴ、口轉ウタ、 屈指クツボク
マ	人倫	患楽クハンラク 賓マラウト	光費クワウヒ 待人マチビト
コ	財宝	笏コツ	小皿コザラ
ア	畜類	鵝鵝アフム 鯨鯨アンカウ	雨鰻アマカイル 悪蟲アクチウ
		求食アザル	海獺アミ
	言語	鯨鯨アイキヤウ	家鴨アヒル
	言語	咬咀アラキザミ	相驗アヒジルシ
サ	言語	(造)一作サク	轉サカサマ
キ	時節	極月キヨクゲツ	究日キウジツ
	言語	(逆)一徒ト	一心シン
ユ	天地	火炉ユルリ	湯殿ユドノ
ミ	言語	窟ミヤヅカイ	救ミツグ
		猥ミタレガハシ	操ミサホ
シ	天地	咫尺シセキ	忍岡シノビノヲカ
		庄シヤウ榻シヂ	磁石山ジシヤクセン
	畜類	鮪シビ	鯉シラハヘ
	財宝	双六篋シゴロクノサイ	酒海シユカイ
	言語	(巡)一路ロ	十成ジウジヤウ
ヒ	天地	泥ヒチリコ	兵庫ヒヤウゴ
	財宝	狂文ヒヤウモン	轉ヒツシキ
セ	財宝	錢ゼニ	線香センカウ
		喩セ、カマル	冤セタグル

ス 畜類 鰻傍訓なし

鮪(同(スシ))

言語 須スベカラク

棄スツル捨(同)

削除三九、増補四二とともに約四六%の項目が、削除された箇所
に増補するという形をとっている。削除項目のうちでたとえば硫
黄イワウ は、ユ部にもユワウとして掲出されている。通行本は重
出している硫黄のうちユワウを残しイワウを削って整理しているの
である。零餘子ムカゴ・ヌカゴ、鵝鵝アフム・ワウム、火炉ユルリ
・田炉裡イロリなどは同様に初刊本では重出していたものを通行本
ではそれぞれ下の形のみを残している。また初刊本で泥ヒチリコは
ドロ、笏コツはシヤクとしても掲出されているが、通行本ではヒチ
リコ・コツを削っている。求食アザルが削除されたのは言語門の回
鳥アザルとかかわりがあるかもしれない。これらの例でわかるよう
に改変はひとつの門、あるいはひとつの部の内にとどまらず、ワ・
ア、ト・ヒなど、全巻を通じて広い見渡しの中行われている。そ
れが可能であるためには重出を避けようという明確な意図をもって
全巻を眺める必要がある。

所屬門の変更について

六十三語を初刊本の掲載順に、通行本での門を併せて示す。

古イニシヘ	天↓時
今イマ	天↓時
稲妻イナヅマ↓ルビなし	時↓天
朝暮イツモ	言↓時
家主イヘヌシ	言↓人
幼イトケナシ	言↓人

香薷イヌエ 言↓草
 猪頭イクビ 言↓支
 撓皮イタメカワ 言↓財
 喪衣イロ 言↓財
 生袋イケブクロ 言↓財
 晴ハレ↓ハル、 言↓天
 貳位ニイ 人(官なし) ↓官
 (人)↓躰タイ↓人躰 言↓支
 宝蔵ホウサウ 言↓天
 法花ホツケ↓法華(経) 言↓財
 俸禄ホウロク 食↓雑
 片時ヘンシ 言↓時
 鶺鴒トリ↓モチ 草↓財
 外様衆トザマシユ↓外様 人↓雑
 嫡々チヤク↓ 言↓人
 知音チイン 言↓人
 聴衆チヤウシユ 言↓人
 智者チンヤ 言↓人
 臨時リンジ 言↓時
 各ヲノ↓ 人↓雑
 往古ワウゴ 天(時なし) ↓時
 碗飯ワウバン 天(時なし) ↓時
 皇城ワウジャウ 言↓天
 皇位ワウイ 言↓人
 往日ワウジツ 言↓時

和薬ワヤク 言↓財
 枯カル、 草↓雑
 痒カユガリ 言↓支
 薪タキ、 草↓財
 即刻ソツコク 言↓時
 即位ソクイ↓ソクキ 言↓官
 即今ソツコン 言↓官
 僧都ソウツ 人(官なし) ↓官
 僧正ソウジヤウ 人(官なし) ↓官
 宗匠ソウシヤウ 人(官なし) ↓官
 通路ツウロ 言↓天
 年始ネンシ 言↓天
 年序ネンシヨ 言↓天
 年老ネンラウ 言↓人
 雷公↓雷ナルカミ 時↓天
 納所ナツシヨ 人↓雑
 老若ラウニヤク 言↓人
 老耄ラウモウ 言↓支
 暴雨ムラサメ 時↓天
 昔ムカシ 天↓時
 温気ウンキ 天↓時
 懐妊クハイニン 言↓支
 毎年マイネン 言↓時
 末世マツセ 言↓時
 末代マツダイ 言↓時

魔マ 人↓生
外道ゲダウ 人↓生
永地エイヂ 言↓天
炎天エンテン 天(時なし)↓時
永代エイタイ 言↓時
暫時サンジ 言↓時
柴シバ 草↓財

これらの項目の初刊本での内訳と通行本での所属門を整理すると次のようになる。

天地七(うち三は時節なし) ↓時節七
時節三↓天地三 草木四↓財宝三・雑用一
人倫九(うち四は官名なし) ↓官名四・生類二・雑用三
食物一↓雑用一
言語三九↓天地七・時節十一・官名一・財宝五・人倫九・草木一・支体五

全体をほぼ四等分してみると、イ↘ヲ 二六、ワ↘ノ 二六、ク↘サ 十、キ↘ス 一と、明らかに後半は少なくなっている。

まず天地と時節との間で変更があったものが合わせて十例ある。他の節用集諸本でこれらの語の所属を調べると、同じように天地乾坤を含む)と時節(時候を含む)とで所属が揺れていることがわかる。調査した大部分の諸本に掲載されている「稲妻・慕雨・温気」の三語について諸本での所属をみると次のようになってい

稲妻(時↓天) 伊勢本略本のうち正宗本は時節、亀田本・玉里本・龍門文庫本(二本とも)・増刊節用集・種徳堂本・岡田希雄本、天正十八年本類の黒川本・早大本・阿波国文庫本は天地。伊勢本増

補本のうち辞林枝葉宮城本は乾坤。印度本黒本本類のうち黒本本・和漢通用集は時節。永禄二年本類では永禄二年本は時節であるが、村井本・慶長九年本・兎空本・経亮本・両足院本と枳園本が天地。弘治二年本類の徳遊寺本・南葵文庫本・天正十七年本は時節。永禄十一年本類の草間本は天地である。天地・乾坤と時節とにわかれているのである。

暴雨(時↓天) 伊勢本略本のうち正宗本・大谷本・増刊下学集・亀田本・龍門文庫本(二本とも)・伊京集・増刊節用集・種徳堂本が時候・時節。岡田希雄本と天正十八年本類(黒川本・堺本・早大本・阿波国文庫本)が天地。伊勢本増補本では辞林枝葉宮城本が乾坤、文明本は時節(見出しは村雨)である。印度本のうち黒本本類(黒本本・図書寮本・和漢通用集)は時節。永禄二年本類(永禄二年本・村井本・兎空本・経亮本)も時節で、枳園本が天地とする。徳遊寺本・南葵文庫本・天正十七年本・草間本は時節である。天地・乾坤と時節・時候とにわかれてい

温気(天↓時) 伊勢本では龍門文庫本(一七七)が言語門に収載するほかは略本(正宗本・大谷本・増刊下学集・亀田本・玉里本・龍門文庫本(一七六)・増刊節用集・種徳堂本・岡田希雄本)増補本(辞林枝葉宮城本・文明本)とも時節・時候。印度本のうち黒本本類(黒本本・図書寮本・和漢通用集)は時節、永禄二年本類(永禄二年本・村井本・兎空本・経亮本・両足院本)・枳園本は天地、徳遊寺本・南葵文庫本・天正十七年本・草間本は時節である。やはり天地と時節・時候とにわかれ、言語門所属も一本みえる。

いま天地門と時節門との間で揺れがみられる語のうち三語についてのみ諸本の所属を掲げたが、これだけでも諸本間にもほぼ同様の

揺れが存すること、饅頭屋本が初刊本・通行本ともに特定の類あるいは本に傾いていないことが明らかである。強いて言えば揺れのある項目に関しては初刊本は永禄二年本類との一致率が高いようである。

初刊本で言語門に収載されていた撓皮・喪衣・生袋の三語を言語門（言語進退・態藝を含む）に所属させている本は他にない。和薬も辞林枝葉宮城本が言語門に収めるのみで、あとは食服門・飲食門・草木門・財宝門にわかれ、通行本は財宝に収める。食服とするのは伊勢本略本のうち増刊下学集・増刊節用集である。飲食は正宗本・大谷本、伊勢本増補本の文明本。草木とするのは伊勢本略本のうち岡田希雄本・天正十八年本類（黒川本・堺本・早大本・阿波国文庫本）、印度本の黒本本類（黒本本・和漢通用集）、枳園本、弘治二年本類（徳遊寺本・南葵文庫本・天正十七年本）と草間本である。伊勢本略本のうち亀田本・玉里本・龍門文庫本（二本とも）・伊京集、印度本のうち永禄二年本類（永禄二年本・村井本・堯空本・経亮本・両足院本）は財宝とし、通行本に一致する。

和薬のように節用集諸本で所屬門が三つ以上にわかれている語として、ほかに晴・俸禄・藪・雷公・納所・末世・末代・魔があげられる。⁽⁴⁾

所屬門に関して初刊本が他の諸本と異なる独自例は言語門の三語のみであったのに対し、通行本の独自例は

- 人体（支） ○宝蔵（天） ○知音（人） ○聴衆（人）
- 臨時（時） ○薪（財） ○即今（時） 宗匠（官）
- 年老（人） ○老耄（支） 外道（生） ○永地（天）
- 永代（時） ○柴（財）

の十四語にのぼる。しかも○印を付した十一語は、初刊本を含め他の諸本にも揺れのみられないものである。とくに知音・臨時・永代・柴の四語は調査したほとんどの本に収載されているにもかかわらず揺れのみられない語である。これらを通行本ではあえて改変したということになる。これら十四語の初刊本での所屬門は、薪（草）、宗匠（人）、外道（人）、柴（草）を除く十語が言語門である。六三語全体で眺めても言語門からの移動は約六割の三九語であった。さきの項目の増減でも半数を超える項目が言語または雑用に所属するものであった。もちろん理由のひとつとして言語門に収載されている項目が全巻を通じて多いということがあげられる。しかし通行本の雑用という門名が示すように、ここには雑多なものが収められ、見直しの余地があるとうけとめられ、実際に此の門での改変も手厚かったと考えることができる。初刊本の独自例が言語門に集中していたことも、初刊本の編纂方針に、とりあえず言語門に入れる、という面があったことをうかがわせる。⁽⁵⁾ さきほど初刊本独自としてあげた撓皮・喪衣・生袋はイ部言語門の末尾におかれており、その直前の猪頭・家主・香蓆をあわせた六項について通行本で所屬が変更されている。かわりに一事同様・勢の二項が加えられている。八部も同様に言語門末尾にかなりの改変がみられる。

同一門内での移動

- 一三七項目とかなり多い。その門別の内訳は
- 天地 十五 時節 一 草木 十一 人倫 十
- 支体 四 官名 一 畜類・生類 四 財宝 二三
- 言語・雑用 六八

で食物にはない。全体を四等分すると、イ↗ヲ 三五、ワ↘ノ 二二、ク↘サ 四一、キ↘ス 三九で、後半がやや多いが全巻にわたっている。

饅頭屋本は初刊本・通行本ともに横本で一面八行、丁数も本文（ス部末尾まで）九十丁とほぼ同じ体裁である。しかしこれまでみてきたように増補や削除がかなりある。門内での移動の理由に関してはイ部時節門の例でふれたような排列の原則にかかわるということがまずは考えられる。また、項目の増減によって字詰の調節を必要があつて移動したと考えられるものもある。たとえばイ部支体門は初刊本では五丁表一行目末に「支体」という門名があり、缺脣・頂・瞥・劓の四項が収められる。通行本ではここに言語門から猪頭が移動して五項になるのであるが、門名の「支体」を少し上にずらし、空いた行末のスペースに頂を移したうえで猪頭・缺脣・瞥・軒としている。結果として次の雑用門は初刊本言語門と同じように門名を行末におく形で始められている。はじめに であげた二部言語門の第一項句についてもスペースの調整のために移されたと述べたが、初刊本で句の次にあつた拳ニギルも同じように前項似合ニアイと入れ替えられて前行末におかれている。この理由で移動が説明できる項目はかなり多い。しかしそれでも入逢・晩鐘が入れ替えられた理由は不明である。ナ部支体門 蹇ナエと訛ナルとの入れ替えなども同様である。

ここで確認しておかなければならないのは、饅頭屋本が項目を入れ替えてまで一項目が二行にわたることを防いでいるということである。初刊本には二行にわたる項目はひとつもなく、通行本では(座)―頭／屏風 一語が二行にわたっている。横本で一行十字程度

のスペースしかない饅頭屋本にとってはなかなか困難なことである。

見出し語の変更

さきにあげたヲ部支体門のヲクビ(于區↓噫)がこの例にあたる。同様の見出し語の漢字表記の改編が六九例、伶人舞↓伶人のような語形そのものの改変が四例である。全体をほぼ四等分すると、イ↗ヲ 二一、ワ↘ノ 二二、ク↘サ 二十、キ↘ス 十一で、最後がやや少ないが全巻にわたっている。ヲクビを例にとると、この語は伊勢本略本にはない。伊勢本増補本では辞林枝葉宮城本・文明本にも于區であつて初刊本に一致する。印度本では、永禄二年本類の慶長九年本・経亮本と枳園本が于區であるが、黒本本類(黒本本・和漢通用集)、弘治二年本類(徳遊寺本・南葵文庫本・天正十七年本)と草間本は噫となつており、通行本に一致する。饅頭屋本ではどちらも支体門で所屬門の変更はないが、諸本では于區は支体門、噫は言語門に収められている。

このように初刊本と通行本とで見出し語の漢字表記が異なるものは多くの場合諸本でもやはり両形がみられる。なかでも、何鹿イツシカ↓早晚(ただしイツカとする本が多い)・石橋イシバシ↓礎・筋ハシ↓箸(同/筋)・茅カヤ↓萱・汀ナギサ↓渚・唇(同/脣)↓クチビル↓脣(同/唇)・緩草(同/萱草)↓クハンザウ↓萱草・衣那エナ↓胞衣・鴛テラツ、キ(同/啄木鳥)↓啄木鳥(啄木とする本が多い)・柴(同/芝)↓芝 などは本によっては一書のうちに両形を示すことがある。とくに鴛↓啄木鳥は収載する全ての諸本で鴛を見出しとし啄木を注に掲げている。筋↓箸は阿波国文庫本を除く

諸本に、汀↓渚は伊勢本増補本の辞林枝葉宮城本と文明本、印度本の天正十七年本の三本を除く諸本に両形を掲げる。

初刊本の形で諸本にみえないものは董シノブ(↓垣衣)一語のみである。節用集での一般的な見出し語形は惹である。一方、通行本では(田舎↓)鄙イナカ(田舎)・(薄↓)鉞ハク・(南無↓)助我ワレヲタスケタマへ・(能路志↓)伐糞ノロシ・(翻↓)劇フタメクの五語が他の諸本にはみられない形である。所屬門と同様、ここでも通行本の独自性がうかがえるであろう。

なお輸贏マケカチ↓雌雄という項目があり、諸本では辞林枝葉宮城本にのみみえるが、ここでは両形が示されている。また、所屬門で触れた柴は、諸本すべて草木門に収め、柴には(焼木)・芝には(野草)あるいは(野之短草)という註を加えて両語を掲げることが多い。(焼木)は天正十八年本類の注では(薪)となっている。薪は節用集に独立項目として採られることが多く、饅頭屋本では柴・薪ともに初刊本の草木から通行本では財宝に移動した独自例としてあげられていたものである。

傍訓の変更

一八七例と改変の中では最も多い。門別の内訳では

天地	二二	時節	七	草木	八	人倫	十
支体	六	官名	七	畜類・生類	十一	財宝	二三
食物	一	言語・雑用	九二				

とすべての門にわたっている。全巻をほぼ四等分すると、イ→ラ三五、ワ→ノ 五二、ク→サ 五六、キ→ス 四四でこれも全巻にわたっている。つまり傍訓の変更に關しては偏ることなく必要と思

われる語に手を加えていると考えることができる。これらを整理すると

A 語形の変更 六十

B かなづかいにかかわるもの 一〇二

C 追加・訂正・削除 二五

となる。

A 語形の変更としてまず 鮎アイ↓アユ・補ヲギヌウ↓ヲギノウ・小舎人コデヌリ↓コドネリ・手代テチダイ↓テツダイ・終日ヒメモス↓ヒネモス・檜楸ホツクイ↓ホタクイ のような発音の変異の例を挙げるができる。琥珀クハク↓コハク・(参)―内ナイ↓ダイ・鄭重テイチウ↓テイデウ・日域ジツイキ↓ジチイキなどは漢字のよみの問題を含む。造作ザウサ↓ザウサク(下にあったザウサクを削除)・(不)―便ビン↓ベンは語の認定にかかわる例である。造作は調査したすべての節用集諸本にこの語を載せており(サ部を欠く村井本・慶長九年本を除く)、節用集の基本項目のひとつである。初刊本がザウサ・ザウサク両語を別項目としていたことが示すように、よみによって意味が異なる。多くの本でやはり別項目としたうえに、ザウサクには(造家)や(番匠)、ザウサには(煩)や(煩敷義也)という註記を加えている。ひとつだけしか掲載しないのは、ザウサのみの阿波国文庫本、サウサクの兎空本・経亮本・天正十七年本のみである。不便については諸本でフベンとフビンとにわかれるが、どちらにも(悼義)という註が付されていることが多い。

掃拭ハキノゴイ↓ハキノゴウ・別ワカール↓ワカレ・宜ヨロシ↓ヨロシク・戯タワムル↓タワフレ・嬉ウレシイ↓ウレシク・冷終ヒへ

ハテ、↓ヒへハツルなどの品詞や活用にかかわるものもここに含まれる。委クハシク↓クハシは傍訓を変更したうえ、四語前にあつた精クハシの前にこれを移動させて精の傍訓を「同」としている。

B かなづかいにかかわるものは例が多く、一〇二例ある。内容別にみると(二例以下のものは例をあげておく)、

ハ↓ワ 十八例うち十三例は合拗音クハ↓クワ

ワ↓ハ 四例

イ↓ヒ 三二例

ヒ↓イ 一例(蛾ヒ、ル↓ヒイル)

イ↓キ 七例

ウ↓フ 三例

エ↓ヘ 二例(反覆ウチカエス↓ウチカヘス・悔還クイカエス

↓クイカヘス)

ヘ↓エ 一例(燼モヘクイ↓モエクイ)

ヘ↓エ 一例(音コヘ↓コエ)

エ↓エ 一例(庚辛カノエカノト↓カノエカノト)

ジ↓ヂ 四例

ヂ↓ジ 一例(但馬タヂマ↓タジマ)

ヲ↓ホ 三例

ホ↓ヲ 二例(鮠トビウホ↓トビウヲ・魚ウホ↓ウヲ)

ヲ、↓ヲホ 六例

ワウ↓ヲホ 一例(大隅ワ部ワウスミ↓ヲ部ヲホスミ)

ヨヲ↓ヨウ 一例(催モヨラス↓モヨウス)

ガウ↓ゴウ 一例(ウケガウ↓ウゲゴウ)

その他開合に関わるもの 十三例

次に C 追加・訂正・削除 については全例を掲げる。

鯛ハス↓ハメ

共恵行トヂヘユク↓ドチヘユク

貞能デウノ↓ヂヤウノウ

界道カウ↓右カイダウ・左カウ

駕輿丁カヤチャウ↓カヨチャウ

珠ルビなし↓タマ

立居タ、ズム↓ズム

作物ツクモ↓ツクリモノ

司ルビなし↓ツカサ

午ウマ↓ルビなし(所属はム部に移動)

回禄(火神)クハイロウ↓クハイロク

果報クホウ↓クハホウ

柳笛ヤナイバコ↓ヤナイバ

亡者マウジャヤ↓ジャ

貧マド↓マドシ

言(同)申マウ↓マウス

辛夷□ブシ↓コブシ

恰アタカ↓アタ

昨日サクジツ↓キノウ

脚布キヤ□↓キヤフ

目メ↓ルビなし

楸サゲ↓ヒサギ

袈ヒト、ク↓ヒモトク

(一)柄ヒダ↓エダ

(勢)―遣ヅスイ↓ヅカイ

このうちハス↓ハメ、(ビト)ヒダ↓エダ、(セイ)ヅスイ↓ヅカイなどは初刊本の誤りを通行本が正したものであろう。昨日をサクジツ↓キノウとした例も、この語がキ部にあることを考えればキノウが正姿である。午ウマをウ部からム部に移した際に傍訓を失ってしまったものや、目メ↓ルビなしの例(このような例を「削除」とした)などは誤脱であろう。つまり改変は必ずしも正しい方向だけを向いていたのではないのである。しかし、柳筥ヤナイバ↓ヨヤナイバは、ヤナイバの例が節用集では阿波国文庫本にみられ、近世の版本である和漢音積書字考にもあって、単なるコノ脱落ではない可能性がある。また、Aに分類したためここには例を挙げていないが、雲綱縁ウンカンベリ↓ウンゲンベリも諸本中にウンカンベリとするものがあり(印度本の兎空本・両足院本・枳園本)、饅頭屋本初刊本独自の語形ではなさそうである。これらについて単純に誤りを訂正したということはできず、今後個々の語についての検証をしていく必要がある。現時点ではすべての語についてそのような判断をすることができないので、A・Cについてはなお流動的であることをお断りしておく。

おわりに

饅頭屋本節用集初刊本と通行本とで改変が加えられている項目について、他の節用集諸本の状況を参照しつつ、その改変の位置づけを試みてきた。はじめに、で立てた教育大本が初刊本、図書寮本が通行本という仮説に齟齬はなかったと思う。とりわけ初刊本は所属門や見出し語の表記の点で他の諸本とはほぼ同じ動きをしているのに

対して、通行本は独自のものをいくつか持っていた。これは再刊に際して新しきを出そうとしたものと考えられる。

全体として改変は概ね節用集諸本中にみられる変異の範囲内に含まれている。変異を内包しつつまとまりを持つという意味で節用集をひとつの資料体として扱うことは可能であるし、そのような方向で扱うべきであろう。もちろん個々の変異については何を反映しているのかをさらに解明していかなければならない。

註

1 岡田希雄氏が「饅頭屋本節用集の冠影再刻本」で報告しておられるのは「四十八丁より巻尾の九十八丁に至る五十一丁の残缺」であり、「四八・四九・九〇の三丁だけが、表裏ともに四周單邊であるのを除いては残り全部四周雙邊」というもので冠影の再刻関係にある。この残欠本には七〇箇所近くの彫崩があることも報告されている。(一九四二年『書誌学』)

『改訂新版古本節用集六種 研究並びに総合索引』には東京教育大学附属図書館蔵本が影印掲載されている。その索引篇「古本節用集六種総合索引のために」第一章「古本節用集解説(中田祝夫氏)」の中に「饅頭屋本の別版である」「この別版の方はいくらか年代が新しいものかもしれない」とある。ただここでその根拠として挙げられている「富小路トミノコウジ」の例はデの末画の下が欠けているのをジとみたものようである。(一九七九年 勉誠社)

『日本古辞書を学ぶ人のために』「饅頭屋本節用集」の項には「室町時代末期(天文・永祿頃)の刊本」、「キ・オ・エ」を「イ・ヲ・エ」に併せ、天地・時節・人倫・官名・人名・草木・畜類・財宝・食物・支体・言語の各門からなる。『増訂古辞書の研究』に本書の古異版として小汀利得蔵本が紹介されているが、「生」(類)「雑」(用)が「畜」(類)「言」(語)のように版によって二門に異なるものもあり、また、語彙の異同等を認められているので注意を要する。」とし、五つの例を挙げる。また「饅頭屋本は、異版別版が多いので、利用には注意することが必要で

あろう。」とする。(一九九五年初版、九七年二版 世界思想社)

山田忠雄氏は『節用集天正十八年本類の研究』序説において節用集饅頭屋本について「伊勢本であるが、意味において他の古写本との連絡は十分に つくのであるが、せまい 空間に 語彙を おほめにいれるために 語注の ほとんどすべてを うしなつてゐるうへに、すくなくとも 通行本に よるかぎり 部名も あらたまつてゐるので他本とは おもむきを ことにする 印象を 禁じえない。」とし、注22として「初刊本(小汀利得氏蔵、教育大学蔵)によれば、天地 時節 草木 人倫 官名 支体 畜類 財宝 食物 言語の十。通行本はおほくの 篇において 畜類を 生類、言語を 雑用 とする。」としている。本稿での初刊本・通行本という呼称はこれによっている。(一九七四年 東洋文庫)

丹藤典子氏・島田榮子氏「古本節用集諸本一覽表」によれば饅頭屋本類には 21 饅頭屋本初刊本 22 饅頭屋本重刊本 がある。初刊本として小汀利得氏蔵・東京教育大学蔵の二本が、重刊本として山田忠雄氏蔵・横山重氏蔵の二本が挙げられている。(一九九八年五月 『日本語と辞書』第三輯)

2 以下、引用に際しては場合によって原本の傍訓を示さなかったり、見出し語の下にカタカナで示したりすることがある。漢字の字形はできるだけ原本に近いものにしたが印刷の都合上かなわなかったものもある。また、へゝ内に示したものは細字双行、／は改行を示す。

3 調査した節用集諸本を掲げておく。公開されているものについてはそれをを用い、一々の出典は記さない。

伊勢本略本

正宗文庫本 大谷大学本 増刊下学集 亀田本(明応五年本)

玉里文庫本 龍門文庫本(一七六・一七七) 伊京集

増刊節用集 空念寺本 種徳堂本 岡田希雄本

天正十八年本類 黒川本(慶長十二年本) 堺本 早大本

阿波国文庫本

伊勢本増補本

辞林枝葉宮城本 饅頭屋本初刊本・通行本 文明本(広本)

印度本

黒本本類 黒本本 圖書寮零本 和漢通用集

永禄二年本類 永禄二年本 村井本 慶長九年本 堯空本
経亮本 西足院本
枳園本

弘治二年本類 徳遊寺本(伊藤本) 南葵文庫本 天正十七年本

永禄十一年本類 草間本(学習院大学本)

4 このうち「魔」はおおむね人倫と畜類・気形とにわかれるが、伊勢本略本のうち龍門文庫本(一七七)・伊京集・増刊節用集は「人名」に収める。山田忠雄氏によれば三省堂本も同様である。

5 印度本では黒本本以外の諸本で言語(進退)門に頭字が同一の語を集め、細字双行で示すという記載方式をとる。宝蔵・法華・智者・永地などはこの方式の中で増補された項目とみられる。皇城・皇位は永禄二年本類と枳園本で言語門におかれていたが、弘治二年本類と草間本とではそれぞれが天地門・人倫門に収められる。これは項目を吟味したうえでの一歩進んだ姿とみられる。饅頭屋本初刊本から通行本への動きは、他の項目からみてこれら諸本とは無関係であるうが、まったく重なっている。